

「野性の残像 - 過去をめぐるイデオロギーの磁場」

小川英文

はじめに - 現在が「過去」をつくりあげるといふ問題

旧石器捏造事件の背景

考古学者がつくりあげてきた過去についてのイメージは、多分に想像がともなってくるのは当然だろう。土器や石器、骨や遺構といった限られた手がかりしか残されていないため、過去を想像するための材料は限られている。材料が限定されているぶんだけ、逆にイメージだけが大きく膨らんでしまうこともしばしばある。考古学者が文字史料すらない時代の歴史を再構成しようとするれば、土器や石器、骨や植物遺体、そして住居址に代表されるような大小さまざまな遺構など、限られた資料しか得ることができない。そのため、過去を生き生きと描こうと試みるなら、手元のない材料の隙間を埋めるため、想像をよりたくましくすることになる。そうした過去の想像の極に、まだ記憶に新しい旧石器の「捏造事件」があった。

90年代の旧石器研究では、毎年のように最古の事例の年代がより古くなっていった。新たな調査のたびに10万年ずつ遡る年代には目を見張るものがあり、いったい日本列島の人類史がどこまで時間的な深度をもつのだろうと思ったものである。しかしながらある時、それらがすべて捏造されたものであるということが暴露された。その後、多くの考古学者たちが、自らの研究の基盤が目の前で瓦解するという焦燥と辛酸をなめる思いのなかで、そして世論に対する負い目のなかで、問題となった旧石器時代の遺跡の再検証を行なった。その結果、それまで60、70万年前まで遡るとされた日本の旧石器時代は、いっきょに3万年前までに逆もどりした。それによって旧石器考古学の研究も20年前の状態に逆もどりしたことになった。

この事件の衝撃は、考古学界はもちろんのこと、考古学や古代史に興味をもつ一般の人びとにまで広く及んだ。あの時期、わたしが考古学をやっているといえ、大抵の人は決まったように捏造事件に言及した。それは過去を想像する現場に直接携わる考古学への疑惑であり、あるいはその想像を事実として流布する学問の権威に対する揶揄でもあった。そうした経験が度重なるにつれて、捏造事件の社会的責任は、その関係者のみに限定されて負わされるものではなく、むしろ考古学者全体にまで及ぶのではないかと考えるようになった。もちろんこの事件に関係していない考古学者は直接の責任を負ってはいない。しかし同時代の日本の考古学者として、旧石器時代の年代がつつぎと遡って行くにつれて、日本列島の、あるいは「日本」の歴史がさらに過去へと遡り、より古くなることに密かに期待をかけ、日本の歴史の古さに誇りを感じていたのではないだろうか。そうであるなら考古学という一定の場を共有しながら過去をイメージし、想像してきたという点において、やはりわたしたちにも責任の一端があるのではないか。考古学者としての責任をこのように考えると、捏造事件は日本人のアイデンティティを形成する際の歴史意識に深く関わっているといえることができる。言いかえれば過去についてのイメージの想像が現代に規定されるという問題に帰着すると考えることができる。

このような考えが成りたつとすれば、捏造事件にはなにかもっと深いところで、今日の日本が抱える問題の構造が関わっており、その構造が日本人や日本の文化の固有性や純粋さの主張を助長しているように思われる。より深い過去へ遡ることが、今日の「日本人」やその文化の本質にたどりつくことができるという意識のもとで、捏造が行われたと考えることができる。しかしながらこのような過去の探求のあり方は、実は、今日の民族や文化についての研究の趨勢や新たな方向性の模索とは逆行するものである。今日、民族や文化は歴史のなかで生成されるものであり、文化の純粋な本質は現在から遡り、過去の事象を拾いあつめて形成されたものであるという考え方が主流となっている。しかしそれでもなお文化の本質は、伝統として長く歴史的に受けつがれたものとして認識されているのが一般的であり、いまなお研究者の間にも通用しているのが現状である。

以上の議論を踏まえここでは、捏造事件から学び取るべき教訓として、考古学者はどのように社会と関わりながら過去へ遡り、特定の歴史的な事象を拾いあげながら今日へと戻ってくるのかという問題を考えてみたい。具体的には、考古学とナショナリズムの問題、そして狩猟採集社会に対するイメージの問題をとりあげる。これらの問題を議論することによって、わたしたちがこれまで自明のものとして、しらすらすらうちに受け入れてきた考古学の学問的枠組み自体が、近代

という特定の時代になってはじめて発明されたものであるかを明らかにする。さらに文化に関する多くの学問分野が近代の見直しをとおして新たな方向性を模索している現在、考古学の学問的枠組みはいかに再編可能なのかを模索する。

考古学とナショナリズム

現在、わたしたちがどのようなしかたで過去についてのイメージを生みだしているのか、そしてその際には、どのような学問的枠組みがわたしたちに影響しているかを考えるために、ここでは考古学とナショナリズムの関係について考える。わたしたちが日頃、当たり前のもの、自然なものとして、これまで問題とされてこなかった部分に光を当ててみたい。ナショナリズムという言葉を知ると、戦前の超国家主義などの極端な例を思い浮かべるかもしれない。そしてこうした戦前の全体主義に対する反省から出発し、政治的関与を避けてきた戦後の日本考古学[Tsude 1995, Habu and Fawcett 1999]の方向性とは対照的な、あまりに政治的な議論であるナショナリズムを、なぜ考古学の場にもち込もうとするのか疑問を抱くかもしれない。しかし考古学のみならず、学問の枠組み自体が実はある意味でとても政治的であることを思い起こす必要がある。

考古学とナショナリズムがどのように関係しているかを考えるためには、過去に遡って歴史を再構築するという考古学の営みが、近代のはじまりから現在まで、ナショナリズムとどのような関係を保ってきたかを振り返る必要があるだろう [Kohl and Fawcett 1995, Diaz-Andreu and Champion 1996, Molyneaux 1997]。考古学がナショナリズムに関与するのは、考古学者が過去を再構成する行為、別の言い方をすれば、表象の問題、つまり過去についてのイメージ生成の問題についてである。過去はどのような場＝空間において表象されてきたのか、それは近代に誕生して現在も存続している国民国家においてである。しかし国民国家という場でナショナリズムがどのように考古学に影響を与え、過去についての表象を生みだしてきたか、そのメカニズムについては、やや複雑な説明が必要となる。

国民国家のイデオロギー装置

ナショナリズムとは何か、一言で述べるとすれば、それは国民国家における国民を創り出すためのイデオロギー統合の思想、またはその運動ということができる。そして国民のイデオロギー統合のために、文化が重要な役割を果たしてきた。この場合文化とは、国民国家内において均質化・同質化されるべき国民文化を指す。国民文化を説明するなら、言語、習慣、服装、宗教、時間感覚、味覚、音感、身振りなどから、思想、知識、芸術、文学、科学に至るまで、本来なら多様な人びとの生活基盤である文化を、国家にとってもっとも望ましい方向へと統合された文化ということができる。そして国民国家成立後に設けられた国境の内側に住む多様な人びとやその文化を均質なものに変え、ひとつの国民文化に統合していくためには、ナショナリズムというイデオロギー装置だけでは不十分である。それには文化的統合を可能にする諸制度が整備されていなくてはならない。それらの諸制度、すなわち国家装置には、政府、学校（教育）、軍隊、裁判所、警察、刑務所、戸籍、病院、交通・通信網、税制、貨幣、土地制度、度量衡、新聞、博物館、劇場、博覧会、祝祭などがあげられる。人びとを国民化するためには、生活のあらゆる局面にわたる身体的で、イデオロギー的な管理や維持、そしてそれらの再生産を可能にする諸制度が不可欠である。

また、ナショナリズムが国民国家において文化的、イデオロギー的な国民統合（＝国民化）を推し進める際に、いまひとつ考慮に入れておかななくてはならない要素は、国家や国民へのアイデンティティ（帰属意識）の形成である。人びとが生れた国家や国民に自らを同一化するときには、彼らによってアイデンティティが自然に表明され、国民としての共同意識が形成される必要がある。そして国民としてのアイデンティティは、上で述べたようなイデオロギーと国家の制度や装置によって創出され、より強化されていく。その時、国民的なアイデンティティには、民族としての歴史的な連続性や純粋性、あるいは伝統文化の固有性などと強く結びつくことがしばしば強調される。

ひとつ例をあげてみたい。ドイツの哲学者フィヒテは、ナポレオンの軍隊に占領され、打ちひしがれたドイツ国民の士気を鼓舞するため、『ドイツ国民に告ぐ』と題された、14回にわたる愛国的講演を行なった。この講演でフィヒテは、ドイツ国民としての歴史的な古さ、民族的純粋性、ドイツ語の言語的純粋性、そして他の国民にはみられない生命の根本的源泉の存在を強調した。さらに、個人の生が根本的源泉に合流することによって永遠の祖国愛を獲得し、根源的民族（Urvolk）としての固有性と自由な精神によって、新たな世界の建設に貢献することを呼びかけた [鶴岡 1997]。この有名な講演は日本でもたびたび翻訳され、近代以降の日本の決定的な節目でしばしば肯定的に参照され、新たな国民の創生に重要な役割を果たしてきた [イ 1995, 西川 1995]。フィヒテの講演のなかで考古学にとって重要な点は、近代国民国家

形成の出発点である 19 世紀の初めの時点で、国民と国家の原初性と永続性が強調され、過去の歴史と伝統が国民のアイデンティティの拠り所となっていることである。

国民国家成立以前までは、地域の共同体の成員としての共同意識やアイデンティティしかもちあわせていなかった人びとが、新たに国民として創生されるには、国民国家内における人びとの歴史の記憶が呼びさまされたり、伝統的文化の独自性や固有性が強調されなくてはならない。このような記憶や伝統が均質なかたちで国民全体に広められていく試みは、国民国家を維持するためにくりかえし行われてきた。このため、わたしたちもそれらの歴史的記憶や文化的伝統になれしたしんでいるため、自然なもの、当然なものとして認識するようになっている。国家の歴史的な固有性や民族や国民の純粋性、文化的伝統を、国民国家創生以前から連綿と存在してきた、自然なものとして受け入れてしまっている。それゆえ、これらが事実かどうか、その生成過程に立ちかえって疑問をさしはさもうとはしなくなっている。西欧で作られた国民国家モデルは世界中で受け入れられたために、現在、国家間ではたがいに自らの独自性や固有性を主張しあう事態が現出するようになっている。そして国民としてのアイデンティティは、文化的伝統の独自性を国際的に競いあうことによって、より強固なイデオロギーとして鍛えあげられている [Jones 1997: 2-3, Diaz-Andreu and Champion 1996: 18-19, Kohl 1998]

グローバル化と文化研究

ナショナリズムが考古学にどのような影響を与えているかを考えるために、その前提となる国民国家の制度とイデオロギー作用について長々と説明してきた。国民の創生には、国家とイデオロギーのさまざまな装置を駆使することによって、それまでの地縁的共同意識を、国民としての新たなアイデンティティへと変換することが必要である。愛国心や国への忠誠心を国民の心や身体に浸透させるときには、しばしば民族の過去から現在への歴史的連続性や文化的伝統の継続性が強調された。その際、考古学は国民の来歴を過去から現在まで、正しく跡づけるという役割を担ってきた。考古学がナショナリズムに関与するのはまさにこの点についてである。考古学も国民国家におけるイデオロギー装置の一部として、国民意識の維持・強化を図り、ナショナリズムの思想と運動に寄与しているということができる。

考古学とナショナリズムの関係について、遺物や遺跡が展示される博物館を例に考えてみよう。博物館が国民の来歴を展示する場として成立して以降、それは国民的な神話の生成と流通に重要な役割を果たしてきた [アンダーソン 1997: 第 10 章]。固有な国民文化や国民性は、過去に向かって掘り進めれば進むほど純化されていく。固有性や伝統として抽出された国民性の本質は、国民国家内の少数民族の伝統や考古遺物のなかに今日でも残滓として保存されており、それを国民全員が共有していると、博物館展示を見た人びとに認識させる。このように博物館は、固有な来歴を等しく共有する国民が暮らす均質な空間を創出するための強力な媒体として存在し、整備されてきたのである [吉見 1992, Russell 1997]。それまで国民に民族の固有性や文化伝統を自明なもの、自然なものとして認識させてきた国民国家それ自体を相対化することが可能となったのは、ごく最近のことである。その背景には冷戦構造の崩壊をはじめとする 80 年代後半以降の歴史の激動があるが、それらの経験を通じてはじめて、国家が宿命としてのあり方から脱自然化されることとなった。巨大な国家の崩壊をひとつの契機として、市民社会の理想や理念に反して肥大化した国家に対する疑念が、国民国家の相対化をいっそう助長していった。

そして国家の崩壊は、冷戦の一方の側のみが現実経験したものだけではなく、われわれが属してきた国家や社会をも含めて、国境線を越えようとする国内外のさまざまな人びとの動きによっても引き起こされている。国境を挟んで行なわれる人びとの大量移動や情報の伝達は、国家を超えた問題群に対してグローバルな視点から対処する必要性をわれわれに迫っている [伊豫谷 1998]。こうした現実世界での大きな変化を経験することによって、80 年代以降、近代の見直しを迫る思想的潮流が生まれ、そのひとつとして国民国家やナショナリズムの研究が大きな奔流を生みだしている。こうした思想的潮流が生みだされたのも、国家が宿命としてのあり方から脱自然化され、ようやく広い視野で見ることができるようになったという解放感と喜びが国民国家論に生気を吹きこんだためである。

国民国家論の枠組みのなかで、ナショナリズム研究も大きな進展をむかえることになった。アンダーソンは『想像の共同体』 [1997] のなかで、近代国民国家という均質な空間と同質的な文化を生きる国民が創出される過程について論じている。そこでは国家とイデオロギー装置によって、同じ言語・時間・記憶が形成され、維持され、国民に共有される。国民国家の均質な空間を維持するためには、印刷技術、言語空間、交通・通信手段などが一体となって国民化の装置を支えていく。こうして国民は、今まで出会ったこともない人びとであっても、国家内の同じ空間に生活する以上、同じ心性・言語・記憶・経験を共有しているものと認識し、想像することが可能となっていく。ひとりの国民から日本人全体を、ま

たある時代の特殊な出来事を国民の集会的記憶とするような想像のあり方は、均質な空間である国民国家においてはじめて可能となる。またホブズボームは、国民的なアイデンティティを支えている伝統や歴史的記憶が、実は国民国家の形成過程で創造、発明されたものであることを指摘した〔ホブズボーム 1992〕。ホブズボームがいう伝統の発明とは、国民国家を形成する主要な民族集団の歴史的記憶や文化要素が、異民族をも含む国民の歴史や伝統として表象され、自然化されて、国民文化として認識されることを指している。発明された伝統は、公的な場や教育によってくりかえし国民に反復されることによって自然な来歴、自明なイデオロギーへと変貌していくことになる。

アンダーソンやホブズボームが想像の共同体や伝統の発明として提示する国民文化の虚構性に対しては、批判もなされている〔スミス 1999〕。それはナショナリズムの起こりを近代国民国家成立以降とするのか（近代主義：アンダーソン、ホブズボーム）、それ以前から存在したとするのか（歴史主義：スミス）によって議論はわかれるが、今日のナショナリズム研究は、国家崩壊の危機、そして国家の内側に無理やりに押し込められた少数民族の力の噴出など 21 世紀的問題に直面して理論的な研究の進展が期待されているのが現状である〔西川 1995〕。

「文明概念」が生み出す過去イメージ

国民国家論の隆盛に伴う最近のナショナリズム研究や文化理論の研究成果を参照しながら、考古学者が過去を表象する行為を振りかえってみよう。わたしたちは現在から考古学が研究対象とする時代へ遡り、そこから折りかえしてもう一度現在へと舞いもどる。戻ってくるときに考古学者がたどる道筋は時間の流れに沿っている。しかしその道筋には必ず一定の方向性が定められてはいないだろうか。つまり断続的で散在する考古学的事象を、飛び石をたどるようにひとつの意味ある方向へと接ぎ木し、つなぎ合わせながら現在までの道筋をたどっていく。考古学者の接ぎ木のしかたは、けっしてすべての事象が一方向だけに秩序づけられないにもかかわらず、まるで人類のエネルギーのすべてが文明（現時点）の方向だけに注がれて進んできたかのような錯覚を与える。文明の力を信じてきた時代には（あるいは捏造が行われる今日でも）、世界中で競って考古学的事象の接ぎ木が試みられ、国民の歴史がつくられてきた。その反面、飛び石や接ぎ木の過程で考古学者に無視された考古遺物も数え切れないほどある。アンダーソンは接ぎ木作用をシリーズ化（serialization）と呼び、国民国家出現以前の歴史上の人物がナショナリズムの先駆として表象され、今日へと結びつけられる過程を描き出している〔アンダーソン 1997: 298-301〕。同じようなしかたで、現在の民族集団が特定の考古文化と結びつけられることもしばしばである〔Veit 1989: 42, Jones 1997: 3-5, Härke 1998: 56〕。これらは考古学という学問が国民国家の成立、そしてその後に行われた諸制度の整備の時期と緊密な関係にあることを示している。

わたしたちは文明という概念がすでに人類史のなかで昔から存在してきたかのように、古代文明という用語を当たり前に使っている。しかし文明の概念が歴史に登場するのは意外と新しく、近代の登場以降のことであり、文明は国民国家の理想的状態として想いがかかれた理念である。文明の歴史を現在から遡って過去を探索したとき、エジプトなどの四大文明が発見され、ギリシャ・ローマを経て、西欧近代国民国家のルーツとして位置づけられることになった。そして同時に、西欧諸国と非西欧地域の諸社会との政治的・経済的な格差は文明社会との距離として認識され、より野蛮な過去の時間に位置づけられることとなった。このことは文明から遠ざかっている地域、すなわち野性が残存する地域に対する西欧世界による植民地支配の正当化の論理としても発動することになった。現在の文明の到達点は西欧の近代国民国家であり、国民国家の諸制度を整備していない非西欧世界は文明の開化していない野性の地として認識された。このような地域は西欧によって文明へと導かれるために植民地化されるべき地であり、植民地の遺跡が西欧によって古代文明として注目されるなら、それらの遺跡は現在その地に住む人びとの歴史から切り離され、西欧宗主国の過去の一部に組み込まれたのである〔小川 1999b, 2000e〕。

考古学を生みだした近代自体が終焉を迎えている現在、考古学自体の学問的枠組みの見直しが行われるべき時期にきていることは確かである。それでは飛び石や接ぎ木にかわる考古学研究のあり方とはどのようなものだろうか。いまのところ明確にその方向を示すことはできない。しかしながら、わたしたちの当面の課題は、考古学者がこれまで文明への道をたどる途中で切り捨ててきたもの、無視してきたものに目を向けることからはじまると考えてもあやまりではない〔Trigger 1984, Layton 1989, Schmidt and Patterson 1995, 小川 1999a, 2000a, b〕。

狩猟採集社会イメージの変貌が提起する問題 熱帯雨林における「カラハリ」論争

考古学者が過去をイメージする際の次の問題は、狩猟採集社会に対する見方の変化が提起するものである。ここでは、先史狩猟採集社会のイメージをめぐるまま論議が続いている2つの論争をとりあげる。はじめにとりあげるのは、70年代以降、狩猟採集社会のイメージを大きく変え、現在でも過去をイメージする考古学者に多大な影響を与え続けているカラハリモデルに対する論争である。

リーらによって行われたカラハリ砂漠狩猟採集社会の生態人類学的研究の成果が *Man the Hunter* にまとめられ [Lee and DeVore 1968], 狩猟採集社会がそれ以前の貧しいイメージから一新された。低い労働投下量で高い生活水準を享受し、自然環境の諸条件に密接に適応するかたちで柔軟に構成された平等主義的共同体であるという新たなイメージは、学会に大きな反響を巻き起こした。この新たな狩猟採集社会イメージは、考古学者にも好意的に受け入れられ、世界各地の先史狩猟採集社会研究に一般モデルとして導入され、考古資料の解釈の場で盛んに用いられた。しかしこの狩猟採集社会のカラハリモデルも 80 年代以降には批判に曝されることになる。

カラハリモデルを批判する修正主義者によれば、かつてのサン(ブッシュマン)はアフリカ東海岸の交易集団との交流をもち、インド洋交易の末端で原材料の調達に携わっていたが、大航海時代以降このネットワークが断ち切られて以降、徐々にカラハリモデルで展開されているような自立的な生活をおくるようになったとされている。そして決して先史時代からずっと他集団との交流をもたずに自立的に生活していたわけではないとウィルムセンらは主張している [Wilmsen and Denbow 1990: 499-503]。カラハリモデルで展開されるサンの生活は、リーらが行なった調査時のみに適合する一事例であって、それ以前のサン社会は外的世界との接触によってさまざまな影響を受けながら生活してきたのであって、決して旧石器時代から隔離されてきたのではないとカラハリモデルの修正を迫った。その後カラハリモデルの有効性を主張する伝統主義者と修正主義者との間で、狩猟採集社会の真正で純粋な伝統性の保持か、あるいはその喪失かをめぐる激しい議論の応酬が展開された [Wilmsen 1989, Solway and Lee 1990, Wilmsen and Denbow 1990, Silberbauer 1991, Lee 1992, Kent 1992, 池谷 1996]。しかしながら、サンの自立的なイメージはカラハリ論争の衝撃とともに徐々に崩れはじめ、自立から周辺社会との接触・依存への変化を歴史に探ろうとする試みがはじまっている [池谷 2002]

カラハリ論争が白熱していたちょうど同じころ、東南アジアからも熱帯雨林下の狩猟採集社会の自立的イメージを変える仮説が提出された。熱帯雨林環境の基本的性格を踏まえてヘッドランドらが提示したのが、農耕社会との交換を制度化して炭水化物食料の不足を補えるようになるまで、狩猟採集民は熱帯雨林へ進出することができなかったという仮説である [Headland and Reid 1989, 1991]。フィリピンの狩猟採集民アグタ (Agta) を長年研究してきたヘッドランドは、タンパク質よりも炭水化物食料の獲得が困難である熱帯雨林の環境下では、農耕社会との社会的・経済的關係なしに狩猟採集社会が熱帯雨林に進出することはほとんど不可能であったと考えた。熱帯雨林の環境下では人間が食用として利用可能な植物資源が、同じ熱帯の季節林やサバンナと比較してもきわめて限られている。熱帯雨林は豊富な日射量と高温・多雨という気候条件に支えられて、単位面積当たりの生物量や生産量の膨大さや種の多様性には目をみはるものがある。しかし熱帯雨林全体が、栄養の分解・摂取・循環のサイクルが非常に速く効率的に行われるため、人間が食用可能な果実・葉・花などの再生産機能をもつ器官の生産に栄養が十分に分配されない。いっけん豊かにみえる熱帯雨林も実は植物食料の獲得が、動物性食料よりも入手困難な環境である [Hutterer 1982, 1983, Headland 1986, 1987]

そのためアグタ社会は熱帯雨林に進出する当初から、農耕社会との接触を保ち、作物を恒常的に補完しなくてはならなかった。両者の交流の開始時期についてヘッドランドらは、フィリピン北部ルソン島の考古資料では農耕社会の存在を示すコメの出現が 3400 年前 [Snow et al. 1986] であること、そしてアグタが自分たちの言語を失い、交流をもつ周辺の農耕民の言語を話していることから推定して、アグタと低地農耕社会との交流が 1000 年以前に、可能性としては 3000 年前にははじまっていたとしている [Headland and Reid 1989: 46]。ヘッドランドの仮説は後にアマゾンで同じ問題を研究していたベイレーらとともに補強され、世界の熱帯雨林狩猟採集社会研究者たちによって検討されることとなった [Headland and Bailey 1991]。このとき他の研究者のほとんどは熱帯雨林の狩猟採集社会が現在でも農耕社会から自立して生活していると主張したため、彼らの仮説は否定されたが、修正主義的仮説であったため、その後も狩猟採集社会研究に大きな影響を与えてきた [小川 1996, 2000a]

「民族誌的現在」と過去という時間の固定化

狩猟採集社会をめぐる起こされた2つの論争は、狩猟採集社会がそれまで他の社会から隔離された状態で自立的に生活を営み、純粋なかたちで今日まで存続してきた狩猟採集社会というイメージを大きく揺るがすものとなった。先史狩猟

採集社会が自立型であったのか、それとも相互依存型であったのかについては考古学的な検討が必要だが、これらの論争のエッセンスは別のところにある。論争の要点は、伝統主義者がこれまで行ってきたように自立した伝統的な、外界から隔離された、純粋な狩猟採集社会をさがし求め、それをモデルとして過去を再構築しようとする視角や枠組み自体に疑問を呈したことにある。伝統主義者の姿勢の背後には、狩猟採集社会の周囲に存在する社会との交流を、伝統や純粋性の汚染とみなす視角が潜んでいる。考古学者はこれまでカラハリモデルを、環境的にも文化的にもまったく異なる世界中の地域に当てはめ、先史狩猟採集社会の文化、歴史の再構築に用いてきた。

日本の縄文時代においてもしかりである。目の前の狩猟採集社会から伝統項目だけを恣意的に選び出して外部世界からの汚染を排除し、先史時代にあてはめるためのモデル構築の材料にするなら、狩猟採集社会を現実から切りはなす一方的な行為となる。それは近代の影響による汚染から防ぐためにこれまで狩猟採集社会を民族誌的現在(ethnographic present, 註1)という静止した時間に閉じ込めて観察、記述する方法を用いてきたわたしたち自身の問題として提起されなくてはならない[清水1992]

民族考古学(ethnoarchaeology)の場で現在の狩猟採集社会を調査して、考古資料と比較するためのモデルを構築するときにも、時空間設定の前提として民族誌的現在は肯定的に用いられてきた。民族考古学に関する英文文献では必ずといっていいほど民族誌的現在が時空間構成の前提としてまず言及され、モデル構築の有効性が主張されてきた。しかし民族考古学によって構築されるモデルの存立基盤自体が民族誌的現在によって仮構されたものであり、外部世界からの汚染を排除することが容認されていたため、純粋で自立的な狩猟採集社会のイメージをいっそう助長することとなった。民族考古学は文化人類学者とは別の目的をもって考古学者自身が民族調査を行い、遺物や遺跡の解釈のためのモデルを構築する考古学の一分野である。本稿のはじめに述べたように、考古学では過去の人びとの生活実態を復元するため、遺物や遺構というハードなデータと、それがいったい過去の人びとのどのような生きざまを示すものなのかという説明との間にどうしても想像が入りこまざるを得ない。このため民族考古学は、過去に生活していた人びとの実態の説明をより蓋然性が高いものとし、説得力あるものとするため、今後とも有効性をもつものとする。しかしその方法自体が、文化人類学の理論や成果に大きく依存した枠組みのなかで許容された方法であったために、80年代まで文化人類学が前提としてきた民族誌的現在が抱える時空間の均質化という問題自体に疑義を呈するものとはなり得なかった。

こうした民族考古学の問題を考えるために、ひとつの事例をあげてみたい。フィリピン、ルソン島北東部、ヘッドランドの調査地から北へ100kmほどのパラナン(Palanan)で狩猟採集民アグタの民族考古学の調査を行っていたピーターソンらは、アグタと農耕民との間にみられる食料、労働力、土地などの交換による相互依存関係の実態調査をもとにして、狩猟採集社会が先史時代から現在まで存続してきた歴史過程を説明するために、交換適応モデル(exchange adaptation model)を提示した[Peterson and Peterson 1977]。このモデルが提示する説明は、狩猟採集社会と農耕社会がそれぞれ異なる生業技術を基盤に、低地と山地という異なった自然環境を利用して、たがいに競争(competition)を避けながら、不足する資源を交換することによって補いあうという生業戦略で、結果的に2つの社会が適応し、存続していくというものである。

言いかえれば、異なった生業形態をもつ2つの集団が、交換を媒介として労働投下量を低く抑え、技術革新を推しすすめることなく、再生産のための絶えざる集約化から免れながら、同時に低い技術レベルで人口を環境収容量(carrying capacity)内に維持することが可能となるというモデルである。このような相互依存の適応戦略によって、狩猟採集社会と農耕社会はひとつの共存のシステムをつくりあげてきたため、結果的に狩猟採集社会が現在まで存続したとピーターソンらは説明する。交換適応モデルは、ボズラップが提示したように、農耕と定住の結果として増加した人口を支えるため、絶えざる技術革新と労働の集約化を必要とする農耕社会の発展モデル[ボズラップ1967]とは際立った違いをみせている。農耕を開始した人類はその後文明を築き上げることになるが、生産の集約化という絶えず膨張するシステムを維持し続けなくてはならなかった。いっぽう交換適応モデルでは、狩猟採集社会と農耕社会とがひとつのシステムとして膨張を抑えた経済的・社会的均衡(equilibrium)状態を獲得することが可能となる[小川1996, 2000a]

ピーターソンらの交換適応モデルはいっけん狩猟採集社会が現在まで存続してきたことをよく説明しているようにみえる。しかしこのモデルには大きな問題がある。それは狩猟採集社会を安定的で、静態的な、変化のない社会に封じ込めようとしている点である。それ以前に東南アジアの狩猟採集社会が今日まで存続していることに対する説明としては、ハイネ・ゲルデルンの隔離モデル(isolate model)があった。隔離モデルは、モザイク状に分布する多様な生業や文化を基盤として生活する東南アジアの諸民族が、たがいに接触することなく生活してきたため、伝統的生活を今日まで継続する

ことができた」と説明してきた。このため隔離モデルは東南アジアの社会を変化に取り残された、停滞した社会というイメージを生みだしてきた。これに対して交換適応モデルは、交換を媒介とする相互依存関係が狩猟採集社会と農耕社会との間で実践されるため、それまでの隔離モデルによる説明とは異なり、狩猟採集社会と外部世界との交流や機能的関係を説明しているかのように見える。しかし実際は狩猟採集社会と農耕社会をともにひとつの閉鎖した世界のなかに封じこめている。交換適応モデルは、70年代以降のプロセス考古学の新たな研究の枠組みによって、隔離モデルを乗り越えるという目的をもっていた。それにもかかわらず相互依存関係で結ばれた、生業や技術的背景の異なるふたつの社会を、ひとつの安定した、長期間にわたって均衡状態を保つシステムとして提示したため、そのシステム外部との影響関係を論じていないという点では、かたちを変えた停滞論、すなわち時空間の均質性のなかでの説明に止まってしまった。隔離モデルの停滞論を打破しようとした交換適応モデルが提示したものは、結局かたちを変えた隔離モデルであった [小川 1996, 2000a]。

「民族考古学」の可能性

70年代以降、カラハリモデルの影響を受けながらじまった民族考古学は、狩猟採集社会の自立性や純粋性をあらかじめ民族誌的現在によって仮構していた。その結果、提示された交換適応モデルも、狩猟採集社会の外部をも取り込んだ閉鎖的世界のなかで展開される、時間の停止した自立的世界、すなわち均質な時空間に閉じこめるものとなった。カラハリ論争以降、リー自身も現在の狩猟採集社会を石器時代の生き残りとすることは慎重に避けている。それでも過去から現在まで変化のない社会とみなす時間の観念 (timeless sense) で狩猟採集社会をとらえていると指摘されている [Shott 1992: 845]。また、70年代のうぶとに影響力をもっていた時代的な雰囲気としては、ベトナム戦争以降、輝かしいはずの文明へ投げかけられた疑問や幻滅である。それによって多くの考古学者が非文明世界における自然と人間との調和や均衡を維持する社会にユートピア像を思い描く原因となり、高貴なる野蛮人イメージを狩猟採集社会に重ね合わせるようになったものと考えられる。

西欧世界が文明社会に幻滅や疑問を感じるようになっても、狩猟採集社会は依然として自己 (=西欧=文明) と対峙する野蛮な他者の世界として表象されつづけてきた。西欧世界が自己認識の投影物として狩猟採集社会のイメージを描くさまは、あるときは野蛮な野性の世界として、またあるときはユートピア世界として、まったく正反対なイメージの間を往復してきたが、このような認識の振幅は西欧という主体のなかだけで繰り返された他者認識の虚しい運動でしかなかった。それゆえたとえプロセス考古学によって新たな理論的枠組みと方法が導入されても、西欧の自己認識の枠組み自体には認識論的な疑問が提示されることはなく、東南アジアにおける狩猟採集社会と農耕社会が同時に存在し、相互関係を保持してきた可能性のある数千年間の歴史は隠蔽されたままであった。こうした自己 / 他者認識に揺らぎが生じ、狩猟採集社会の自立性や純粋性、そして均質な時空間の虚構性に対する議論が活発になるには、これまで科学的客観主義によって研究対象とされてきた狩猟採集社会自体から、一方的な表象のあり方に対する異議申し立てが盛んとなり、それに対して研究者がこれまでの学問的枠組みの見直しをはじめようになる時期までまたなければならなかった [例えば Lane 1996, Skotnes 1996, 永原 2000, Russell 1997]。

わたしたちが囚われてきた狩猟採集社会に対するイメージは、わたしたちの側で一方向的につくりあげたイメージであった。そうしたイメージが説得力をもたなくなった現在、狩猟採集社会に対するわたしたちのまなざしや学問的枠組みのあり方も変化を余儀なくされている。そして今後、民族考古学の調査を実施する際には、これまで前提としての民族誌的現在を排除したうえで、調査対象社会の現状が必ずしもそのまま過去を反映しないこと、そしてその社会もわたしたち同様、これまで外界からのさまざまな影響を受けて変化してきたことを認識する必要がある。こうした姿勢はまた、カラハリ論争における伝統主義と修正主義の対立を乗り越えるひとつの方法ともなるだろう。

「野性」の残像

わたしたちが過去についてのイメージを描くとき、どのような枠組みにたよっているかという問題をさぐるために、ナショナリズムというイデオロギーと狩猟採集社会 (= 他者) に対する認識のあり方について事例をあげて考えてきた。そこで繰り返りひろげられたわたしたちの過去に対するイメージは、ナショナリズムにおいても他者認識においても、野性という先入観のもとで描かれていた。ここでいう野性とは、人間の心のおくに潜む野蛮さや残忍さではなく、他者を認識するとき、「彼らは野蛮だ、文明化されていない」というように、類型化されたかたちで表明されるものを指している。わた

私たちは自分を取りまく世界を秩序づけるために、自己や他者を類型化しながら生活している。そして野性は、他者や過去と自己との距離をはかるときに、これまでしばしば用いられてきた類型であった。また野性は優れた自己と劣った他者を確認し、両者の距離をはかる基準でもあった。さらに近代の時間的観念のなかでは、野性は自民族の歴史のある時点に置きかえられてきた。「彼らはわたしたちよりも30年遅れている」という表現をしばしば耳にするのは、わたしたちが他者を自己の過去に位置づけるしかたに習熟しているからである。このとき野性を鮮明に描きだすものは、文明化された社会や国家において整備された諸制度や文化であった。

野性は他者を蔑み、政治的に支配するための口実という側面をもつが、これとは正反対の性格ももちあわせている。自民族の歴史の初源における野性的な姿は、今日、あこがれの対象になっている。すなわち野性はピュアであり、純粋性として肯定的にとらえられ、あこがれとして表象されている。上で論じてきたように、過去へのあこがれが国民国家のイデオロギーと結びついたとき、ナショナリズムの道具ともなる。現在、日本や世界中の国々で行なわれているように、社会や国家の枠組みが揺らいでいる時代には、国家がナショナルな一体感を国民に要求する際に、民族や伝統の古さや純粋性がしばしば強調される。今日でも、民族の起源から日本人の性質を論じ、現代の問題を語る例は少なくない。しかし、冷静に考えると、数千年、数万年前の日本列島に住んでいた人びととわたしたちとの間にどのような関係があるというのだろうか。過去と現在のわたしたちを結んでいるのは、現在の国家をになう民族が、その過去や起源においてもっていた純粋で固有な野性が、今日のわたしたちにまで引き継がれているという確信、あるいは「暗黙の前提」[小熊 1995: 403]でしかない。日本文化論では、こうした暗黙の前提にたった議論がいくたびとなく重ねられてきた。しかし、そうした議論は歴史の歪曲や捏造ではない。遠い過去に遡る民族の起源には確固たる証拠をもって議論することはむずかしい。それゆえ、明確な歴史的証拠が得られないぶん、その議論には想像の領域がより大きくひろがっていく。いっぽう今回の捏造事件では、民族の起源にせまる確定的証拠を捏造したことが判明したからこそ、学問の世界からは忌むべき行為とされたのである。

これまでの議論から、野性は過去とふかい結びつきを保ちながら、他者をとうして自己を確認する写し鏡という側面と、自分の来歴の原点としてあこがれる対象という側面の二面性をもっていることが明らかとなった。考古学も野性のもつ二面性との関連のなかで、近代以降発展してきた。しかしながら、野性のもつ二面性の枠組みのなかで考古学の研究をつづけていくことがむずかしくなってきたことも明らかとなっているのが、現状である。他者認識の問題として文明の枠組みを、そして過去へのあこがれの問題として民族誌的現在を前章で議論したように、近代以降、考古学が研究の前提としてきたこれら野性の二面性はすでにほころびをみせている。これからの考古学では、これまで暗黙の前提としてきた野性の枠組みをそのまま踏襲して研究をつづけることはできない。新たな研究の方向性の模索は、まずは過去表象としての野性を、研究の枠組みを転換するための問題として発見することからはじまるだろう。わたしたちがこれまで研究のなかで前提としてきた野性を見直すことから始まるだろう。こうした自らのなかにある暗黙の前提を見直し、問題を発見する研究のあり方は、一般的な考古学研究のあり方である、遺物や遺跡の解釈の問題を一定の解決へとみちびく研究のありかた（問題解決型）とは相容れない研究の方向性ではない。これら2つの研究のかたちは、たがいに往還するなかで、研究の枠組みの認識的転換が図れるものといえるだろう。

註

1: 民族誌的現在とは、近代以降の世界システムの広がりによって、いわゆる伝統社会が汚染されたことを基本認識として、なるべくこの汚染を排除しながら伝統項目を記述するために仮構された時空間の枠組みを指す。民族誌的現在に依拠していた80年代以前の民族誌の記述では、自然環境や生業、親族構造にはじまって、最後に近代の影響が伝統社会の汚染、崩壊の危機というかたちで言及された[清水 1992, クリフォード・マーカス 1996, ロサルド 1998]

文献目録

アンダーソン, ベネディクト(白石隆・白石さや訳)

1997 『増補 想像の共同体 - ナショナリズムの起源と流行』 NTT 出版

イ・ヨンスク

1995 『国語という思想 近代日本の言語認識』 岩波書店

池谷和信

1996 「<伝統主義者>と<修正主義者>との間の論争をめぐる-カラハリ・サン研究の事例-」, 『民博通信』 No.73: 64-77

2002 『国家のなかでの狩猟採集民 - カラハリ・サンにおける生業活動の歴史民族誌』, 国立民族学博物館研究叢書(4)

伊豫谷登士翁

- 1998 「グローバリゼーションとナショナリズムの相克」, 伊豫谷・酒井・スズキ(編)『グローバリゼーションのなかのアジア』: pp.233-242, 未来社
- 鷓飼哲他
1997 『国民とは何か』 河出書房新社
- 小川英文
1996 「狩猟採集民ネグリの考古学: 共生関係が提起する諸問題」, スチュアート ヘンリ(編)『採集狩猟民の現在』: pp.183-222, 言叢社
1999a 「考古学者が提示する狩猟採集社会イメージ」, 『民族学研究』63-2: 192-202.
1999b 「東南アジア 発掘の歴史と考古学の課題」, 吉村作治(編)『東南アジアの華 アンコール・ポロブドゥール』: pp.75-89, 平凡社
2000a 「狩猟採集民と農耕民の交流: 相互関係の視角」, 小川英文(編)『交流の考古学』: pp.266-295, 朝倉書店
2000b 「総論 交流考古学の可能性」, 小川英文(編)『交流の考古学』: pp.1-20, 朝倉書店
2000c 「狩猟採集民」, 安斉正人(編)『用語解説 現代考古学の方法と理論 III』: pp.131-141, 同成社
2000d 「ナショナリズム」, 安斉正人(編)『用語解説 現代考古学の方法と理論 III』: pp.187-198, 同成社
2000e 「文明」, 安斉正人(編)『用語解説 現代考古学の方法と理論 III』: pp.227-234, 同成社
- 小熊英二
1995 『単一民族神話の起源』 新曜社
- クリフォード, ジェイムス; ジョージ・マーカス(編)(春日・足羽・橋本・多和田・西川・和爾訳)
1996 『文化を書く』 紀ノ国屋書店
- 酒井由美子
1993 「ネイションとナショナリズムに関する理論的研究の現在: <モダニスト>的アプローチを中心として」, 『法学新報』Vol. 99, No. 9-10: 157-198
- サイド, エドワード(板垣雄三・杉田英明監修, 今沢紀子訳)
1993 『オリエンタリズム』上・下, 平凡社
- 清水昭俊
1992 「永遠の未開文化と周辺民族-近代西欧人類学史点描-」, 『国立民族学博物館研究報告』17-3: 417-488
- スミス, アンソニー(巢山晴司ほか訳)
1999 『ネイションとエスニシティ: 歴史社会学的考察』 名古屋大学出版会
- 永原陽子
2000 「博物館のなかの先住民」, 『歴史評論』601: 60-69
- 西川長夫
1995 『地球時代の民族=文化理論 - 脱「国民文化」のために』 新曜社
- ホブズボーム, エリック他(編)(前川啓治, 梶原景昭 訳)
1992 『創られた伝統』 紀伊国屋書店
- ボズラップ, E. (安沢秀一・安沢みね子訳)
1967 『農業成長の諸条件』 ミネルバ書房
- 吉見俊哉
1992 『博覧会の政治学』 中公新書
- ロサルド, レナート(椎名美智訳)
1998 『文化と真実 社会分析の再構築』 日本エディタースクール出版部
- Diaz-Andreu, M. and T. Champion (eds.)
1996 *Nationalism and Archaeology in Europe*. London: UCL Press
- Habu, J. and C. Fawcett
1999 Jomon Archaeology and the Representation of Japanese Origins. *Antiquity* 73: 587-593
- Härke, H.
1998 Archaeologists and Migrations. *Current Anthropology* 39: 19-46
- Headland, T. N.
1986 Why Foragers Do Not Become Farmers: A Historical Study of a Changing Ecosystem and Its Effect on a Negrito Hunter-Gatherer Group in the Philippines. 2 vols. Unpublished Ph.D dissertation. University, Microfilms International, Ann Arbor.
1987 The wild yam question: How well could independent hunter-gatherers live in a tropical rain forest ecosystem? *Human Ecology* 15: 463-491
- Headland, T. N. and R. C. Bailey
1991 Introduction: Have Hunter-Gatherers Ever Lived in Tropical Rain Forest Independently of Agriculture? *Human Ecology* 19:2: 115-122
- Headland, T. N. and L. A. Reid
1989 Hunter-gatherers and their neighbor from prehistory to the present. *Current Anthropology* 30: 43-66
1991 Holocene foragers and interethnic trade: A critique of the myth of isolated independent hunter-gatherers. In Gregg, S. A. (ed.) *Between Bands and States*: 333-340, Center for Archaeological Investigations. Southern Illinois University at Carbondale. Occasional Paper No.9.
- Hutterer, K.
1982 Interaction between Tropical Ecosystem and Human Foragers: Some General Considerations. Working Paper. Environment and Policy Institute, East-West Center. Honolulu.

- 1983 The natural and cultural history of Southeast Asian agriculture. Ecological and evolutionary considerations. *Anthropos* 78: 69-212
- Jones, S.
1997 *The Archaeology of Ethnicity. Constructing identities in the past and present.* London and New York. Routledge.
- Kent, S.
1992 The Current Forager Controversy: Real Versus Ideal Views of Hunter-Gatherers. *Man* 27: 45-70
- Kohl, P.
1998 Nationalism and Archaeology: On the Constructions of Nations and the Reconstructions of the Remote Past. *Annual Review of Anthropology*. 27: 223-246
- Kohl, P. and C. Fawcett (eds.)
1995 *Nationalism, politics, and the practice of archaeology.* Cambridge: Cambridge University Press.
- Lane, P.
1996 Breaking the mold? Exhibiting Khoisan in Southern African museums. *Anthropology Today* Vol.12 No. 5: 3-10.
- Layton, R.
1989 Introduction: conflict in the archaeology of living traditions. In Layton, R. (ed.) *Conflict in the Archaeology of Living Traditions:* 1-31
London and New York: Routledge
- Lee, R. B.
1992 Art, Science, or Politics? The Crisis in Hunter-Gatherer Studies. *American Anthropologist* 94: 31-54
- Lee, R. B. and I. DeVore (eds.)
1968 *Man the Hunter.* Chicago: Aldine:
- Molyneaux, B. L. (ed.)
1997 *The Cultural Life of Images - Visual Representation in Archaeology.* London and New York: Routledge.
- Peterson, J. T. and W. Peterson
1977 Implications of Contemporary and Prehistoric Exchange Systems. In Allen, J., J. Golson and R. Jones (eds.) *Sunda and Sahul:* 567-599,
New York: Academic Press.
- Russell, L.
1997 Focusing on the Past. Visual and Textual Images of Aboriginal Australia. In Molyneaux, B. L. (ed.) *The Cultural Life of Images - Visual Representation in Archaeology.* London and New York: Routledge.
- Schmidt, P. R. and T. C. Patterson
1995 Introduction: From Constructing to Making Alternative Histories. In Schmidt, P. R. and T. C. Patterson (eds.) *Making Alternative History. The Practice of Archaeology and History in Non-Western Settings:* 1-24, Santa Fe: School of American Research Press.
- Shott, M. J.
1992 On recent trends in the anthropology of foragers: Kalahari Revisionism and its Archaeological Implications. *Man* 27(4): 843-872
- Silberbauer, G. B.
1991 Morbit Reflexivity and Overgeneralization in Mosarwa Studies: Review of E. N. Wilmsen 1989. *Current Anthropology* 32: 96-99
- Skotnes, P.
1996 Introduction. In Skotnes, P. (ed.) *Miscast. Negotiating the Presence of the Bushman:* 15-23. Cape Town: University of Cape Town Press.
- Snow, B. E., R. Shutler, D. E. Nelson, J. S. Vogel and J. R. Southon
1986 Evidence of Early Rice Cultivation in the Philippines. *Philippine Quarterly of Culture and Society* 14: 3-11
- Solway, J. S and R. B. Lee
1990 Foragers, Genuine or Spurious?: Situating the Kalahari San in History. *Current Anthropology* 31: 109-146
- Tsude, H.
1995 Archaeological Theory in Japan. In Ucko, P. (ed.) *Theory in Archaeology: A world perspective:* 298-311. London and New York: Routledge
- Trigger, B.
1984 Alternative Archaeologies: Nationalist, Colonialist, and Imperialists. *Man* 19: 355-370
1988 *A History of Archaeological Thought.* Cambridge: Cambridge University Press
- Veit, U.
1989 Ethnic Concepts in German Prehistory: a case study on the relationship between cultural identity and objectivity. In Shennan, S. J. (ed.) *Archaeological Approaches to Cultural Identity:* 35-56. London and New York: Routledge.
- Wilmsen, E. N.
1989 *Land Filled with Flies: A Political Economy of the Kalahari.* Chicago: The University of Chicago Press
- Wilmsen, E. N. and J. Denbow
1990 Paradigmatic history of San-speaking peoples and current attempts at revision. *Current Anthropology* 31: 489-524